

19世紀ベンガルにおける「オリエンタリスト」

伊 藤 高 章

英国のインドにおける実質的支配は、東インド会社が1765年8月16日にベンガル、ビハール、オリッサ三地域の徴税権・司法権・行政権を獲得することに始まる。形式的には、会社がこの地域の領主としてムガル皇帝から認められたことを意味するが、これがその後の英国によるインド支配の出発点である。英国議会は1769年にこの状況を追認し、会社が年間40万ポンドを政府に納めることを条件に、この地域の税収を会社のものとすることを決定した¹⁾。その後議会は、会社のインド内における活動への監督権を強化する意味で1773年に「規制法 The Regulation Act²⁾」を制定し、ベンガル総督 Governor-General of Presidency of Fort William in Bengal のポストをつくり、私企業によるインド経営から、英国の責任における統治へと踏み出したのであった。

1774年に初代の総督に就任したのがウォレン・ヘイスティングス Warren Hastings (1733-1818) である。彼のインド統治の方針、特に法行政における方針³⁾は、現地の文化を尊重しインド人自身の法理念を活かしながら行うものであった。しかしその意図にも関わらず、彼自身の背負っている英国文化に基づく先入観によって、現地の価値観に根ざした法制度の整備は現実のものとはならなかった⁴⁾。そしてこの法行政における失敗が、既に論じたように、次の時代に英国本国で展開する福音主義宣教論⁵⁾のきっかけとなったことは否定できない。福音主義的な動きは、英国における功利主義

的な思想を先取りしたものと言える。そして、その影響がインドに波及してきたときに、以下に論ずるヘイスティングス＝ウェルズリー理念は放棄され、「ナショナリズム」の理念が英国がインドに向かう際の基本的な前提となっていくのである。

本稿は、ヘイスティングスの思想理念を受け継ぎ、ベンガル英国人の中で「オリエンタリスト Orientalists」⁶⁾と呼ばれた人々を紹介するものである。福音主義宣教論が排除してしまった、彼らの思想を再発見することを通して、インドにおける伝統宗教とキリスト教の出会いの萌芽を想起し、現代におけるキリスト教と他宗教の共存のあり方を探るための一助としたい。

I. 「オリエンタリスト」の思想史的背景

Stephen Neill は、ヘイスティングスは「インドはインド人の手によって、彼ら自身が理解したインドの古くからの偉大な伝統を受け継ぐ形で、統治されなければならない」という信念を持っていた、と評している⁷⁾。このような思想は、彼の経歴に由来する面もある。彼は青年時代から東インド会社の職員としてインドに暮らし、インド人の生活・文化に深い共感と理解を持っていた。自らも現地の言葉を駆使することができ、特にムガル帝国の公用語であったペルシャ語を自由にこなしたと言われる。しかし、ヘイスティングスの考え方に反対する福音主義の立場にあって、そのインド問題関係の中心人物であったチャールズ・グラント Charles Grant (1746-1823)⁸⁾も同様な経歴を持っている。彼は1768年以来22年間インドに滞在した。彼らの思想を一概にそのインド経験に帰することはできない。経歴に加え、英国本国思想史との関係においても理解されなければならないだろう。

18世紀末にインドに渡った知的エリートたちの多くは、明らかに当時のヨーロッパに展開していた「啓蒙主義」の影響下にあった。ヘイスティングス及び彼に続く「オリエンタリスト」達の思想背景として重要であろう。ヴォルテール、ギボンらに代表されるこの思想は、ベッカー⁹⁾によると以下のよう

歴史観からすると、進歩を目指すよりは古典への回帰を理想とし；
世界観では国家主義的であるよりは世界市民的；
人間性の探求においてはロマン主義的であるよりは合理的；

そしてそれら思想が関係性として表現されるとき、寛容の精神が生まれてくる。

この思想は、背後に人間性に対する信頼をもっており、多様な表現をとる人類の諸文化はそれぞれ価値あるものと意識されていたと思われる。この思想背景については、英国思想史の厳密な研究に譲らなければならないが、以下に紹介するようなカルカッタにおける「オリエンタリスト」達のインド文化への視点は、ベッカーによる分析を例証しているように思われる。

19世紀初期における英国内の東インドに関する議論の中心となる、先に挙げたチャールズ・グラントまたウィルバーフォース William Wilberforce ら福音主義者によって展開された宣教論は、このような思想と別なところに基礎を持っている。彼らの議論は現地の主要な英国人行政官らの経験に根拠を求め、インドの人々の倫理感の欠如を論拠として、キリスト教宣教の必要性を強調する。彼らの思想的な背景はやがて J・ミル James Mill そしてその子 J・S・ミル John Stuart Mill によって全面的に展開される功利主義思想¹⁰⁾と親和性を持っている。この立場は、インド内に英国の制度思想を移入することによって統治を効果的かつ安定的なものにしようとする方向づけをもっていた。

Ⅱ．ウォレン・ヘイスティングスの理念

まず、ヘイスティングス自身の考え方を見てみたい。ヘイスティングスの業績を振り返るとき、インド総督であった彼を取り囲んでいた参事たちとの確執が、必ず取り上げられる。インドでの実務と現地の人々との交わりを長年経験し、その中で最高の能力を認められて総督になった彼にとって、ともに働くべき人々の無能が我慢ならなかったのであろう。特に、現地の文化へ

の無理解と、それを学ぶ能力の欠如が彼を苛立たせた。

このような状況を憂いてヘイスティングスが試みたのは、1773年の、オクスフォード大学にペルシャ語の講座を設ける提案¹¹⁾だった。また彼は本国に対して、新たにインドに渡る若い官吏が、渡航前にペルシャ語とヒンドゥスタニ（ウルドゥー）語を学習してくることを強く要望した。ムガル朝支配下の当時のインドにおいて、またその後19世紀なかばに至るまで、ペルシャ語はインドにおける外交・行政・裁判の公用語であり、ヒンドゥスタニ語はイスラム影響下のインドにおける *lingua franca* であったからである。明らかに彼は、現地の人々とのコミュニケーションを基礎とした行政を考えており、英国制度の移入をそれに優先させるようなことはなかった。残念ながら、ヘイスティングスのコミュニケーションを基礎にした考え方は、彼の在職中に英国内で支持を得られなかった。しかし、インド内、特にベンガルにおいては、インド文化の専門家が着実に育っていた。

行政の直接の必要からすると、日常業務に活用するため、ヒンドゥー法・イスラム法を英語に翻訳する必要があった。反対に、東インド会社の規則を現地の言葉にしておく必要があった。これらをきっかけにしたベンガル地方での文化交流は、双方にとって大きな刺激となった。例えば、ヘイスティングスの若き側近 Nathaniel Halhed は1778年に *A Grammar of the Bengali Language* を公刊した。この文法書は、英国人官吏の学習書として書かれたものだが、言語学的に究めて優れたものでもあり、後に言及するベンガル語研究の巨人 William Carey らにも大きな影響を与えただけでなく、ベンガル・ルネッサンスと呼ばれる現地の文化・文芸の復興運動の直接のきっかけとなった、とも言われる¹²⁾。

官吏として働きながら、語学や文化の研究に力を注ぎ、英国ならびにインドの東洋学の発展に大きな痕跡を残した人々が多くいる。たとえば、マルダ地方の官吏だった Charles Wilkins は、サンスクリット語をマスターし、1783年に *Bhagavad Gita* の英訳や、碑文の解説に依るベンガル歴史の再構築などの業績を残した。彼はアジア協会 The Asiatic Society の創設にもかか

わり、オクスフォードより「サンスクリット学者」としての功績を認められて名誉学位を与えられている¹³⁾。また Henry T. Colebrooke は、聖地ベナレスの近郊に勤務する間に文献の調査を進め、ヒンドゥー法、サンスクリット学の研究に不朽の業績を残した。彼は1807年にカルカッタの最高理事会のメンバーとなり、1813年からは最高裁判所の判事となった。Jonathan Duncan は、研究者というよりは実務家として東洋学に貢献した。彼はベナレスに“Hindu College”を創設することを1791年に提案した。その目的として「信仰の中心地において、この国の法・文学・宗教の保存と育成を行うこと」を挙げている。具体的には、現存する文献を収集することとその研究により、「最古の価値ある学問と伝統のライブラリー」を目指していた¹⁴⁾。

ヘイスティングスの理念は、東インド官吏の中に、商業や行政に携わるだけでなく、インドへの関心の第三の可能性を養っていたことが分かる。すなわち、インドの文化、社会、言語を研究する方向である。

カルカッタ在住の官吏兼東洋学者たちの運動と言えるのが、アジア協会 The Asiatic Society の創設である。もともとは、インドの古典を英訳していた高級官吏の集いだったと思われる。やがて、初代の会長 William Jones によって、単なる翻訳ではなく、学問的研究を中心とする協会の方針が決定され、時代を画することになる。その研究成果である機関誌 *Asiatic Researches* は、インド文化研究の最高水準を示すものとして、当時ヨーロッパの学会で注目されるようになって行った。

ジョーンズは協会の会長への就任講演の中で、

アジアの歴史、自然史、考古、芸術、科学、そして文学の研究は、人類と自然の真理を探究するための道である

と述べている¹⁵⁾。先に紹介した「啓蒙主義」思想を受け継いでいることがわかる。彼らにとって、アジア研究を普遍的な人類史の研究の一部と見、インドの英知を深く知ることが人類の真理の探求であった。William Jones の場

合、世界市民的立場は単なる理念の表明に止まらなかった。彼の名が今日でも記憶される最大の理由は、彼のこの理念が、学問研究の成果として、しかもわれわれの人類文化理解の重要な基礎事実の発見として結実したからであった。彼は、サンスクリット語とギリシャ語ラテン語との言語学的な近親性を発見した。今日われわれが持っている「印欧語族 Indo-European languages」と言う概念の基礎は、ジョーンズによって提唱¹⁶⁾されたのであった。

彼等の立場が〈インドの古代社会を理想視して、この社会が抱える問題に取り組むことから目をそらしている〉という批判が、後の時代にされるようになった。「古典主義」といわれる彼らの立場に対する批判¹⁷⁾で、まず功利主義思想の影響下でおこなわれた。しかし、先に紹介した Colebrooke は、古代の法文献の研究を通して、ヨーロッパ人が最も問題視する制度「サティー」が本来のインドの伝統からの逸脱であることを明らかにし¹⁸⁾、現存の「カースト」制度は、その基礎とされ神聖視されているはずの古代の社会規範と大きくずれていることを指摘している¹⁹⁾。後に彼の視点は、サティーに強く反対したヒンドゥー思想家 Rammohan Roy にも一部引き継がれ²⁰⁾、また、総督ベンティンク William Bentinck (1827年ベンガル総督着任) によるサティー廃絶²¹⁾の思想的基盤を提供した。

Ⅲ. College of Fort William

次に注目されるのは、1800年に当時のベンガル総督であったウェルスリー卿 Marquess Wellesley によって提唱された College of Fort William である。この高等教育機関の中に、ヘイスティングスの理念が具体化している。外面的には、このカレッジは当時の英国が直面していた二つの歴史状況の影響下で誕生した。

第一は、世紀の変わり目にヨーロッパ世界をゆるがしたフランス革命である。英国は長い間、ムガル帝国内の諸藩王との通商権をめぐって、インドの地でもフランスと拮抗をしていた。ナポレオンの活動自体がインド内フラ

ソスの軍事的脅威に対するイギリス人の危機意識を強くさせていた。そして、啓蒙思想には共感しつつも、フランス革命のイデオロギー自体は危険思想とみなされ、若き東インド官吏達がこの思想に影響されないようにすることが必要と考えられていた。ウェルズリーは、次のように述べている²²⁾。

フランス革命の思想がヨーロッパ大陸において声高に叫ばれている異常な状況の中で、インドにおけるわれわれの会社の官吏や軍務につく者達の何人かが、その誤った考えに毒されているという事実は否定できない。……彼等の若い心に、正しい宗教と政治秩序を確立することが、インドにおける英国の支配が安定するために、最も大切なことごとである。

つまり、インド行政を担ってゆく若者たちを、フランス革命思想から遠ざけるために、積極的な教育を行ってゆこうとする意図がカレッジ創設の背景にあった。この路線に則り、カレッジには、二人の英国教会のチャプレンが配属され、それぞれ学長と副学長の立場で若者の思想面での指導に責任を負っていた²³⁾。

カレッジ設立の第二の、そしてわれわれの関心にとってより重要な歴史的要請は、しっかりとした教養教育 Liberal Education²⁴⁾ を受けた官吏の養成の必要である。英国議会の、1773年、1784年、そして1793年の、再三にわたる法令により、英領東インドにおける東インド会社の行政責任が確認されている。しかし、会社の書記、商館員、商人がその地域における裁判官、行政官、また政治の責任を担う者となるための訓練は、18世紀中は実質的には全く行われていなかった。東インド会社の社員となった若者は、13歳から16歳ほどでインドに渡り、そのまま事務員の徒弟として仕事を始め、その仕事を続けてゆく。正規の教育は準備されていなかった。このような状況の中でウェルズリー卿が考えたのは、ケムブリッジ、オクスフォードのカレッジと比肩しうるような規模と内容を持った高等教育機関の設置であった。

ウェルスリーは、インド官吏への教養教育の内容をヘイスティングスから受け継いだ現地文化尊重の基盤の上に築こうとした。まさに、このカリキュラムが、当時の「オリエンタリスト」たちの思想的立場の宣言とも言える。そこではイスラム聖典の言語であるアラビア語、ムガル朝の公用語ペルシャ語、インドの古典語であるサンスクリット語に加え、インドの口語6語のコースが備えられ、イスラム法・ヒンドゥー法・イングランド法及び法哲学そして東インド会社の内規が研究教育された。加えて、政治経済学、世界地理、数学、地誌、植物学、化学、天文学の授業もあった。ヨーロッパ諸言語、ラテン語、ギリシャ語、英文学を学ぶ機会も用意されていた²⁵⁾。ウェルスリー卿の理念のよく現れている点は、「ヒンドゥスタンとデカンの歴史と遺産」と呼ばれる講座を設け、当時世界の東洋学の最高研究機関であったアジア協会と共同して、インド文化の研究教育を奨めたことである。

このカレッジは、カリキュラムからも分かるように、英国の文化を絶対視し、その普及を通してインド的なものを凌駕してゆこうとする姿勢を持ってはいない。むしろ、会社の将来を担う若者に、インド文化を直に吸収できる語学の素養を身につけさせ、インド文化の持つ「自立性と一貫性」integrityを十分理解した上で行政にあたれるように教育を施す機関となることが目指されていた。確かに、カレッジ設立以前から現地における東インド社員の昇進の過程は、現地語の能力との相関で考えることができるほどであり、ヘイスティングスおよびウェルスリーの理念が、ある意味で当時のインドにおける英国人の価値意識に大きな影響を及ぼしていたことが分かる。

ヘイスティングスのインド文化に向かう姿勢は、インドの伝統的な社会規範が果たしうる役割に信頼をおいている。英国内での議論が福音主義的なインド文化への否定的な評価に傾き始めたころ、ヘイスティングスらの現地文化尊重の理念は英領東インドの拠点カルカッタを中心とするベンガル地方で、その後も継承され発展を遂げていた。

IV. William Carey (1761–1834) の「オリエンタリスト宣教論」

インドへのキリスト教宣教に関心のある者にとって、19世紀初頭にベンガルに活躍したクリスチャンの中で最も興味深いのは、ケアリーである。インドのみならず、宣教の歴史を学ぶ者であれば必ず彼の名を目にしたことがあるはずである。彼は、英国バプテスト教会最初の海外宣教師であり、聖書翻訳・出版・配布を組織的に開始し、アジアにおける近代福音宣教の出発点をなすセランプール・トリオと呼ばれる3人組の中心である。彼らが唱えた幾つかの非キリスト教地域における「宣教原則」はよく知られている。しかし、ケアリーの業績を当時の思想状況の中に位置づけ、「オリエンタリスト」として理解するのでなければ、彼らの主張の真意は把握しきれないと思われる。1793年にカルカッタ北東のデンマーク領セランプールに到着し活動を開始したケアリーは、1800年からその生涯の終わりまで College of Fort William の教授として、東インド会社の官吏養成の中枢に位置し、かつベンガル総督府が最も信頼する言語文化の専門家であった事実を忘れてはならない²⁶⁾。

ケアリーに関する研究は、欧米では長い歴史がある²⁷⁾。伝記的な記述は省略し、本稿では、ケアリーの経験から明確にされてきた「宣教原則」を検討してみたい。現在これが語られるときには、あまりその意味するところの深みまで目を向けられることなく、表面的に受け入れられてしまっている感がある。しかしここには、英国福音主義とはむしろ対立するような宣教観が込められていることに注目したい。同時期に英国の議会を中心に展開されていた宣教論を「福音主義」と形容するならば、ケアリーは、それとはっきり対比されるべき「オリエンタリスト」宣教論を展開していると、見るべきである。

第一の原則は、現地語主義である。ケアリーは、ベンガルの英国人コミュニティにおいては、まずもって College of Fort William のベンガル語の教授であった。彼の作ったベンガル語の読本である *Kathopakathan* (『会話集』) は、この言語が日常生活の中で、話し手の階層に影響を受けながら、豊かに用いられていることを記述していた。ベンガル文学の専門家である S.K.

De は、この読本が民衆の微妙な表現を共感豊かに記述したものであるだけでなく、最初の民族誌な記録にもなる価値を持っていると評価する。さらに、地域言語への注目が地域文化の意識の芽生えに大きな影響があったとする²⁸⁾。ベンガルに生活する人々が、その人達自身の論理で生きることを受け入れ、彼らの生活そのものと対話しながら、思索し行動していたのがケアリーであった。ベンガル語に留まらず、彼はインドに数多くある言語の数種に精通しており、それぞれへの聖書の翻訳を手がけている。もちろん古典語であるサンスクリットにも造詣が深く、1806年に Colebrooke が引退した後をうけ、カレッヂのサンスクリットの教授をも兼任した。言い換えると、ケアリーはベンガルにおいて最も現地の文化に共感を持ち、それとの対話に努めた人物であった。この第一原則は、単に言語の習得をすすめるのではなく、現地日常文化への共感を求めている。

第二の原則は、現地の宗教や習慣への理解を深めることである。ケアリー自身は『ラーマーヤナ』の翻訳を手がけ、セランプール・トリオの William Ward はヒンドゥーの習慣・習俗に関する四巻にのぼる大著を書いた²⁹⁾。ベンティンク総督の反オリエンタリストの立場からの次のような言葉³⁰⁾と対比するときが、彼らがインド文化研究をすすめたことの独自性をよくあらわしている。ベンティンクは言う：

……（インドの）文学の研究を促進することは、それらが人類にとってきわめて重要な課題に対しておおいに誤った見解を持っていることからして、理性にも倫理にも反しており、文化的中立性を保ちながら（支配する）という（英国議会の）方針とも相容れない。なぜならそれは、誤った宗教に付随する誤った歴史・誤った天文学・誤った医学を普及させることになるからである。

第三は、話し言葉による宣教の強調である。神学議論よりも、イエスの物語や行い、そしてその死と復活の話を、文字によつての理解ができない大衆

に伝えることの重要さが提唱された。これは、大衆の中に入っていくことを意味する。それはまた、大衆の生活との日常的な接点を大切にするということでもある。セランポール・トリオは、原始共産制とも言える共同生活を営んでいた。各自の収入は共同のものとされ、そこから各家庭は必要に応じて支出をした。ケアリーのカレッチからの給与も、セランポールの出版事業や教育活動の経費や収入も、みな共同のものとされた。これが『使徒言行録』にもとづく聖書主義だとしても、それがインドの大家族制とも親和的に理解されていたと想像できる。この第三原理は、現地の生活習慣へ参加することを間接的に意味している。

第四は、聖書翻訳の必要と緊急性を説く。まさにセランポールの事業の意味がここにある。ある説によると、彼らの出版した聖書は44カ国語にのぼる³¹⁾。聖書翻訳・出版事業は、一方では確かに現地への西欧の思想の導入である。しかし、多くの国々にとってこれが史上初めての自国語の出版活動となる。ベンガル・ルネッサンスといわれる地域文化の隆興は、この出版事業なしには考えられない。事実最初のベンガル語新聞はセランポールで1818年発刊した *Samachar Durpan* (The 'Mirror of News') である。

後に1835年に功利主義的思想の持主であるベンティンク総督によって決定されたインドにおける教育政策は四つ柱からなっており、次のように要約できる³²⁾：

- 1) ヨーロッパの文学と科学を広く伝えることが、インドにおける英国政府の責務である。
- 2) 教育のための全ての予算は、英語による教育だけに支出する。
- 3) サンスクリット大学、ムスリム大学への公費支出は行わない。
- 4) 東洋文献の印刷のためには公費支出は行わない。

これらはセランポールの方針と真っ向から対立するものと言える。

第五の原則は、教会を現地の人々によるものにする、という方向性である。

これは抽象的な理念ではなく、具体的な問題への対応として主張されている。すなわち、洗礼を受けるものが出てくると、彼らの生き方と彼らを囲む社会との様々な軋轢が生じてくる。特にインドの場合はカーストの問題がある。ケアリー達は、カーストが人間を区別する差別的制度であるとして、容認しない方針を持っていた。洗礼を受けたものは、カースト差別から離れた者として、出身カーストに関わりなく、ともに食卓を囲むことが求められた。カースト区別の表現として誰と食事を共にするかを大切にするインド人にとって、これは、地域共同体の中でアウト・カーストになることを意味する。受洗のためアウト・カーストになり、地域共同体で生活できなくなってしまった者を、セランプールの印刷工場などで雇用するような事態も起こってきた。洗礼と経済的な利益とが不健全に関連することを極度に警戒していたケアリー達にとっては、やむを得ない対応だった。しかしそれはやがて工場で働くために洗礼を受けるような事態となりかねなかった³³⁾。英国の技術や経済に依存するようなクリスチャンの生活形態が広まってしまうことを回避する必要から、現地の人々による現地の人々が経済的にも支える教会形成が、理念として登場してくることになる。

本国の教会が主導権を持ち、本国教会に思想的・制度的・そして財政的に依存する教会のイメージが、福音主義の立場には残る。具体的には、英国教会の主教制度において、現地人の主教が登場するまではかなりの時間を過ごさなければならないからである。そもそも主教は、教区と呼ばれる地理的な広がりにより司牧の権限を有する。カルカッタが英国インド支配の拠点である以上、その主教が現地人になる可能性は皆無である。つまり、英国教会福音主義は、現地の人々による教会を築くことは制度的に不可能なのである。ケアリー達の教会論は、これとは異なる。

第六に彼らを取り上げた宣教の原則は、教育の強調である。ケアリーはセランプールに学校を創設するにあたり、教育について次のように語っている³⁴⁾：

神の光の拡がりはややかなものである。個人においても、国家におい

ても……。宣教の働きの一部は確かに異教徒の改心のためのものであろう。しかし同時に、「やがて時は来る」との思いで、栄光の時へと道を示す働きもあろう。現地の人々のためのフリースクールは、この後者の目的のためのものである。

小学校レベルのものが始められ、のべで八千人もの子供がセランポールで教育を受けた。やがて、高等教育機関が設立されることになり、1816年には“A college for the instruction of Asiatic Christians and other youth in Eastern Literature and European Science”が誕生した。ヨーロッパの知識への道を開いてくれる英語の教育は重視された。しかしこの学校は、既に紹介したような、ベンガル総督府の教育方針とは大きく異なる内容を持った学校であった。S. Neill は、この学校の教育内容を次のように説明する³⁵⁾。:

教育の根本に、サンスクリット教育がある。クリスチャンであろうとなかろうと、この古典語は全学生の必修科目であつた。クリスチャン学生にとっては主にインド思想を理解するために。ヒンドゥーの学生にとっては現代語を豊かにするため。

以上の一連の、ケアリーの宣教原則を彼の働いた社会状況に照らしてみると、明らかに福音主義の宣教論とは異なる、文化理解、文化接触の理念が見えてくる。

V. まとめ

ウォレン・ヘイスティングスの抱いたインドと英国との文化接触の理念は、彼に続く約半世紀の間ベンガル地方を中心に、豊かな才能に恵まれた者たちに受け継がれていった。それらは、The Asiatic Society として、College of Fort William として、またセランポール・トリオの宣教論として、各分野に大きな遺産を残した。

他方、英国教会福音主義の人々の宣教論、そしてその思想と微妙な親和性を持つ功利主義も、期を同じくして、こちらは英国本国を舞台に展開していた。

インドに向かう二つの異なった理念は、19世紀初頭にはそれぞれ展開する場があった。やがて徐々に両者の対立が、インドの現場において明らかになり、やがて様々な利害関係を絡めながら、拮抗を繰り返すようになるのである。

注

- 1) Parshotam Mehara, *A Dictionary of Modern Indian History, 1707–1947*. Delhi: Oxford University Press, 1985. p.776.
- 2) 13 Geo. III, c.70.
- 3) Warren Hastings, *Historical Documents of British India* (edited by G. W. Forrest), 2 vols. Delhi: Anmol Publications, reprinted 1985.
- 4) 拙稿「一八世紀末インドにおける英国の宗教政策」、キリスト教史学会『キリスト教史学』第49集, 1995年. 参照。
- 5) 拙稿「一九世紀初期英国教会福音主義の『東インド宣教論』」、キリスト教史学会『キリスト教史学』第44集, 1990年. 参照。
- 6) David Kopf, *British Orientalism and the Bengal Renaissance: The Dynamics of Indian Modernization 1773–1835*. Berkeley: University of California Press.
- 7) Stephen Neill, *A History of Christianity in India, 1707–1858*. Cambridge: Cambridge University Press, 1985. p.18.
- 8) 後に下院議員さらに東インド会社の総裁になる。経歴の詳細については、*The Dictionary of National Biography* 参照。彼の福音主義者としての働きについては、拙稿, 1990年24頁以下, 参照。
- 9) C. L. Becker, *The Heavenly City of the Eighteenth Century Philosophers*. New Heaven: Yale University Press. pp.107–108.
- 10) J. Mill, *Hisotry of British India*. Notes and Cotinuation by H. H. Wilson. 9 vols. 4th ed., London: James Madden. 1840. 功利主義思想とインド支配の関係については、稿を改めて検討する予定である。この問題については、Eric Stokes, *The English Utilitarians and India*. Oxford : Clarendon Press, 1959.;

- C. H. Philips “James Mill, Mountstuart Elphinstone, and the History of India,” in C. H. Philips (ed.), *Historians of India, Pakistan and Ceylon*. London: Oxford University Press, 1961. などを参照。
- 11) Proceedings of the College of Fort William in *Home Miscellaneous Series*, CCCCLXXXVII. National Archives, New Delhi. 193–207; 213–215. B. B. Mirsra, *The Central Administration of the East India Company*. Oxford: Oxford University Press, 1959. p.383 に引用。; David Kopf, 1969. p.18.
- 12) Kopf, 1969. p.20. 近代ベンガル文学の展開と「オリエンタリスト」達との関係については, S. K. De, *History of Bengal Literature in the Nineteenth Century*. 2nd ed., Calcutta : Firma K. L. Mukhoupadhyay, 1961. 参照。近代インド文学史の全般については K. Kripalani, “Modern Literature,” in A. L. Basham (ed.). *A Cultural History of India*. Oxford: Clarendon Press, 1975. 参照。
- 13) Kopf, 1969. p.27.
- 14) Kopf, 1969. p.30.
- 15) W. Jones, “A Discourse on the Institution of a Society,” *Asiatic Researches* Vol. I , 1788. p. ix.
- 16) W. Jones, “Third Annual Discourse,” *Asiatic Researches* Vol. I , 1788. pp.422f.
- 17) 西洋文明からの「オリエント」に向ける視線については, 近年, エドワード・サイードによって根本的な批判がなされている。当然のことながら, 本稿で扱っているテーマもその視点から文明史的に検討を必要とするが, 今回は割愛せざるを得ない。Edward W. Said. *Orientalism*. N. Y.: Georges Borchardt, 1987. を参照。
- 18) H. T. Colebrooke, “On the Duties of a Faithful Hindu Widow,” *Asiatic Researches* Vol. IV , 1795. pp.209ff.
- 19) H. T. Colebrooke, “Enumeration of Indian Classics,” *Asiatic Researches* Vol. V , 1798. pp.53ff.
- 20) R. Roy, *Abridgement of the Vedant*, 1815. (reprinted in T. deBary, *Sources of Indian Tradition*. New York: Columbia University Press, 1958); R. Roy, *A Second Defence of the Monotheistical System of the Veds*. (Vol. CCCCLXX of Indian Office Library Tracts). Calcutta. 1817.
- 21) Regulation XVII, AD1829 of Bengal Code.

- 22) Richard Colley Wellesley, "Minute on the Foundation of a College at Fort William, July 10, 1800." (reprinted in M. Martin ed., *The Despatches, Minutes and Correspondence of the Marquess Wellesley, K.G. ; during his Administration in India*. Vol. II. London: W. H. Allen, 1837. p.346). Kopf, 1969. p47. に引用。
- 23) S. Neill, 1985. p.144.
- 24) オクスフォード, ケムブリッジ両大学による教養教育と, 当時英国に台頭してきた新たな専門技術の教育とは, 格を異にしていた。E. P. Thompson, *The Making of the English Working Class*. Penguin edition, 1968.; Stuart Piggin, *Making Evangelical Missionaries 1789-1858: The Social Background, Motives and Training of British Protestant Missionaries in India*. (Vol. 2 of G. E. Duffield (Senior Editor), *Evangelicals & Society from 1750*). n.l.: The Sutton Courtenay Press, 1984. pp.28ff.
- 25) Kopf, 1969.
- 26) Bentinck は, 「オリエンタリスト」の考え方に反対し, 英国の思想制度の導入, 英語教育推進を図ったベンガル総督である。College of Fort William を実質的に衰退させた責任も, 彼に帰せられるべきである。しかし, 彼が就任直後に行ったサティーを禁ずる法令制定にあたって, そのベンガル語訳を担当したのはケアリーであった。S. Neill, 1985. p.158.
- 27) 膨大な研究成果の中から, 基本的文献は: J. C. Marshman, *The Life and Times of Carey, Marshman and Ward: Embracing the History of the Serampore Missionaries*, 2 vols. London, 1859.; G. Smith, *Life of William Carey, Shoemaker, Missionary, and Professor of the College of Fort William*. London: John Murray, 1885; A. H. Oussoren, *William Carey: Especially his Missionary Principles*, London, 1945.; W. L. Woodall, *William Carey of India*, New York: Pageant Press, 1951.; K. P. Sen Gupta, *The Chrsitian Missionaries in Bengal 1793-1833*, Calcutta, 1971.; M.A. Laird, *Missionaries and Education in Bengal 1793-1837*, Oxford: Clarendon Press, 1972.。彼の思想・活動と当時の社会状況・思想状況・政治状況との関係は, 今日のキリスト教と社会の問題を考える際にも大切な視点を与えてくれるはずである。特にアジアの伝統的な文化とキリスト教が接触し, また経済的関心が社会の問題意識の中心を占めている日本において, ケアリーの研究は大きな意味があるはずである。ケアリー研究のみならず, アジアにおけるキリスト教史の研究が十分にされていない状況は残念である。

- 28) De, 1961. pp.122ff.
- 29) 1811年の版は *An Account of the Writings, Religion and Manners of the Hindoos, including translation from their principal works* と題され、後の版は *A Views of the Hisotry, Literature and Religion of the Hindoos, including a minute description of their manners and customs, and translation from their principal works* となり、さらに何回かの書名の変更があったとされる。Neill, 1985. p.504 n.21.
- 30) *The Correspondence of Lord William Bentinck*, Vol. II: 1832–35. London, 1977. pp.1403ff. S. Immanuel David, “‘Save the heathens from themselves’: The Evaluation of Educational Policy of the East India Company till 1854,” in *Indian Church History Review*, Vol. XVIII, June 1984. p.26.
- 31) S. Neill, 1985. p.197.
- 32) S. I. David, 1984. p.27.
- 33) S. Neill, 1985. p.199.
- 34) S. Neill, 1985. p.199.; A. H. Oussoren, 1945. pp.282.
- 35) S. Neill, 1985. p.200.